
若葉色の飛竜

マシュー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

若葉色の飛竜

【Nコード】

N8919M

【作者名】

マシュー

【あらすじ】

若葉色の飛竜、若者、狩猟刀、幼竜。

若葉色の飛竜を前にして、若者は窮地に立っていた。ぐつと奥歯を噛み締めると、冷たい汗が首筋を伝った。

モンスターの骨と牙由来の狩猟刀ではさすがに敵しかったかなと、若者はひとり自嘲した。

目の前の飛竜にまさに今、食べられんとしているのである。

木々に紛れる鮮やかな若草色の甲殻に身を包んだその飛竜は、鋭い目付きで若者を邪魔者として観察しているのだ。

だが…

さつきから若者は、どこかその飛竜に違和感を感じていた。何かを庇っている…？

しきりに後ろを気にし、若者に対して執拗に牙をむくその飛竜。

もしかして、と若者が疑惑を抱いた時、手に乗る程の小さな小さな飛竜が、よたよたと危なっかしい足つきで雌火竜の足元から歩いてきた。

雌の火竜は慌てた様子で、顎で巢に押しやろうとするが、子どもの飛竜の好奇心は強く、若者の足元にじゃれつきはじめた。

ここ一帯を縄張りにし、付近を荒らしまわっている雌の火竜の討伐を頼まれた若者が、木々の生い茂るこの森にやってきたのは、今しがたのことである。

若者が雌火竜を見つけるよりも早く、雌の火竜が若者に踊りかかったのだ。

これが理由だったのか…と小さな飛竜を抱き抱えると、雌火竜がゆっくりとこちらへ歩みよってきた。

低い声でひと声、何か言くと子どもの飛竜をくわえ、巢に戻ってゆく。

一度、若者を振り返り、長く逞しい尻尾をゆらりと振った。

「……それで、貴殿は何もせず、ノコノコとこのポケット村へと帰ってきたわけだな？」

コートを着こんだネコートが、しゅらんと鈴を鳴らして若者に言った。

「いや…あの飛竜にも家庭というものがあるんだなあ…」

「ばかもんっ」

（後書き）

以前書いたものをリメイク。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8919m/>

若葉色の飛竜

2010年11月12日10時03分発行